

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

ブラフマニズムとヒンドゥイズム—南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性

Brahmanism and Hinduism: Change and Continuity in South Asian Society and Religion

2. 研究代表者氏名

藤井 正人

FUJII Masato

3. 研究期間

2016 年 4 月 - 2019 年 3 月 (1 年度目)

4. 研究目的

ブラフマニズム(バラモン教)は、ヴェーダ文献に基づく宗教儀礼と生活・社会規範を含む古代インドの支配的宗教体系である。その後の仏教やジャイナ教など、ヴェーダに基づかない非正統派の宗教の成立と前後して、ブラフマニズムの内部および周辺から、新しいタイプの信仰形態、宗教思想、宗教儀礼をもつヒンドゥイズム(ヒンドゥー教)が形成されていった。しかし、ブラフマニズムはヒンドゥイズムへと移行・解消したのではなく、両者はインドの社会と宗教の二つの基軸として、現代に至るまで並存し、混淆し、互いに影響を与え合ってきている。本研究は、ブラフマニズムとヒンドゥイズム、およびそれらと距離をおきながらも共存してきたその他の宗教との通時的および共時的関係に関する研究を通して、南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性を解明することを目的としている。

5. 本年度の研究実施状況

本研究では3年の研究期間を半年ごとの全6クールに分け、各クールごとにテーマを設定し、複数回の定例研究会とクール最後のシンポジウムを開催している。今年度第1クールでは、ブラフマニズムからヒンドゥイズムへの「知」の変化と発展に関して複数の視点からの報告が行われ、10月に「古代インド思想における『知』の深化『知』の拡大」をテーマに第1回シンポジウムを開催した。第2クールでは、ブラフマニズムとヒンドゥイズムにおける「出家・苦行」を取り上げ、定例研究会で報告を行うとともに、年度末に「古代インドにおけるアセティズムの諸相—禁欲・苦行・出家—」をテーマに第2回シンポジウムを開催した。

7. 本年度の研究実施内容

2016-05-27

「ラーマの双子の息子たちーヴェーダに見るその人物像の期限ー」

発表者 手嶋 英貴 京都文教大学

2016-06-24

「正しい言語使用に基づく功德と至福ー文法学派のダルマ論序説」

発表者 川村 悠人 日本学術振興会特別研究員(京都大学)

2016-07-22

「Maitrayani Samhita における ya evam veda / ya evam vidvan の使用法 ブラフマニズムにおける哲学的傾向の源流を探る」

発表者 天野 恭子 大阪大学

2016-09-23

「ヴェーダとサーンキヤのあいだー『マヌ法典』の存在論をめぐってー」

発表者 手嶋 英貴 京都文教大学

2016-10-08

第1回シンポジウム「古代インド思想における『知』の深化 『知』の拡大」

「祭事を裏付ける「知識」を巡ってー古ヴェーダ祭式文献における yá evám□ vidvan / véda の使用法と哲学思想の発展ー」

発表者 天野 恭子 大阪大学

「初期文法学派のダルマ論ーヴェーダ世界と日常世界における知行ー」

発表者 川村 悠人 日本学術振興会特別研究員(京都大学)

「ヴェーダとサーンキヤのあいだーマヌ法典の存在論をめぐってー」

発表者 手嶋 英貴 京都文教大学

2016-11-18

「ハルシャ王と女神崇拝ー王権儀礼の観点からー」

発表者 横地 優子 京都大学

2016-12-16

「初期シヴァ教最古学派・パーシュパタの伝えるディークシャーについて」

発表者 大島 智靖 東京大学

2017-01-20

「リグヴェーダ以降の文献における *sindhu-* について」

発表者 山田 智輝 大阪大学

「初期仏典における梵我一如の併存」

発表者 名和 隆乾 大阪大学

2017-02-17

「白衣派ジャイナ教における出家の許可基準に関する議論」

発表者 河崎 豊 東京大学

「*brahmacārin* 再考 — ヴェーダからポスト・ヴェーダへ —」

発表者 梶原 三恵子 東京大学

2017-03-03

「ジャイナ古層聖典における *saṃyama* の意味について」

発表者 八木 綾子 京都大学

「*Dāksāyana* 祭が示唆するもの—祭式の整備と社会の変化—」

発表者 西村 直子 東北大学

2017-03-25

第2回シンポジウム「古代インドにおけるアセティシズムの諸相—禁欲・苦行・出家—」

「聖典学習者と禁欲—*brahmacārin* 再考—」

発表者 梶原 三恵子 東京大学

「社会に取り込まれた苦行—ヴァーナプラスタ(林住者)と山林苦行者—」

発表者 藤井 正人 京都大学

「誰が出家すべきか—白衣派ジャイナ教資料に見える議論をめぐって—」

発表者 河崎 豊 東京大学

「ジャイナ古層聖典における *saṃjama* の意味について」

発表者 八木 綾子 京都大学

2017-03-26

第2回シンポジウム「古代インドにおけるアセティシズムの諸相—禁欲・苦行・出家—」(続き)

「初期シヴァ教のディークシャーとヴェーダ」

発表者 大島 智靖 東京大学

「パーシュパタ派のヨーガ」

発表者 横地 優子 京都大学

8. 共同研究会に関連した公表実績

第1回シンポジウム「古代インド思想における『知』の深化 『知』の拡大」

(2016年10月8日 京都大学人文科学研究所)

第2回シンポジウム「古代インドにおけるアセティズムの諸相—禁欲・苦行・出家—」

(2017年3月25日・26日 京都大学人文科学研究所)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	2 (0)	0	0	0	24 (0)	0	0	0
学内	1	6 (2)	0	1 (0)	2 (0)	49 (22)	0	11 (0)	14 (0)
国立大学	4	16 (3)	0	1 (0)	2 (0)	125 (26)	0	5 (0)	16 (0)
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	3	3 (1)	0	0	0	24 (12)	0	0	0
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	9	27 (6)	0	2 (0)	4 (0)	225 (60)	0	16 (0)	30 (0)

※()内には、女性数を記載

13. 次年度の研究実施計画

次年度(第2年度)の第1クール(4月から9月)では、「神話、説話、表象」をテーマに定例研究会で班員がそれぞれの専門から報告を行い、9月にこのテーマで第3回シンポジウムを開催する。第2クール(10月から3月)では、「儀礼」をテーマに定例研究会で報告を行うとともに、年度末に第4回シンポジウムを開催する。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究では3年の研究期間を半年ごとの全6クールに分け、各クールごとにテーマを設定して定例研究会とシンポジウムを開催する。各クールのテーマとして、一年目は「知」「出家・苦行」、二年目は「神話・説話・表象」「儀礼」、三年目は「哲学・学問」「現代へ／現代から」を予定している。研究成果の公表としては、各クールの最後に公開シンポジウムを開催するとともに、定例研究会での報告とシンポジウムでの発表を踏まえて、各クールのテーマに関して論文を完成させ、複数巻の論文集として出版する計画である。